愛光NEWS
2024年9月

２０２４（令和６）年１０月３１日発行
（編集）愛光本部
（TEL）０４３－４８４－６３９１
（HP）https://www.rc-aikoh.or.jp/

１０月５日（土）、愛光秋まつりが開催されました。今年は、佐倉市に法人が移転して、３０周年となります。今年の秋まつりはテーマを「地域への感謝」とし、開会式の後に、３０周年記念イベントとして、お祝いの鏡開きを行いました。イベントの後には、日頃からお世話になっているボランティアの方々を表彰し、感謝状を贈らせていただきました。

当日は、途中から小雨が降りだす生憎な天気でしたが、舞台の上では、太鼓の演奏や、猿の演芸、また、多くの模擬店の出店をいただき、ご来場くださった地域の皆様と一緒に楽しいお祭りの時間を過ごしました。

□事業経過など（2024.9.1～）

2	月	ネットワーク WT
3	火	業務執行会議/秋まつり実行委員会
4	水	地域食堂委員会
5	木	メンター委員会
7	土	理事会
9	月	内部統制構築 PT
10	火	総合避難訓練/防災委員会/感染症対策委員会、衛生委員会
11	水	コ･ヒューマントレーニング WT/子育て WT
12	木	後援会運営委員会/広報委員会/4 年目交流会
17	火	佐倉圏域実績会議/内部統制構築 PT/試用期間終了面接
18	水	実践発表会
19	木	リスクマネジメント委員会/ネットワーク構築 WT/試用期間終了面接
20	金	ボランティア委員会
24	火	テクニカルスキル研修/コンプライアンス委員会/試用期間終了面接
25	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務ビジョン PT/ 地域食堂ともいき
26	木	高齢者福祉事業部実績会議
27	金	試用期間終了面接

■月報から

□事例発表会　　（ルミエール）

１８日に法人実践発表会がはちす苑で開かれ、ルミエール職員も発表の機会をいただき、利用者支援について発表することになった。利用者の日中に行う作業支援の「消す支援から補う支援へ」をテーマとして発表した。何度も作業の内容を確認、変更しながら本人にあった作業を提供していく過程を発表し、限られた時間の中で十分に伝えられたかはわからないが担当職員の熱意と利用者の笑顔は伝えられたと思う。

法人実践発表会は無事に終了したが、その３日前の１５日に家族会の場で３組の事例発表会を開催した。内容は利用者支援や、法人の地域食堂の報告等、ご家族と後見人に職員の取り組みを知ってもらいたい気持ちもあり行った。以前にも家族会で事例発表を行っており、思ったより家族の興味、反応もよく施設内でどのようなことが行われているかがわかったとの話や、食事の支援でここまで考えて進めていて、このような場面を見ると他のことも安心できるとの言葉もいただいた。ご家族、後見人に職員の取り組みを知ってもらう他に、職員自身が人前で自分がやっていることを知ってもらうこととして発表の機会を設け体験できることは職員の将来に大きなプラスになると考えている。

愛光職員として外部で発表する機会もあり施設内、法人内で発表することができる環境はとても恵まれており、これからも多くの職員が発表できるようにしていければと思う。

（ルミエール課長　原　宏之）

□全国制覇！！　　（めいわ）

毎月１回、あおばの会を開催している。参加した利用者の皆さんに楽しんでもらおうと、令和２年10月から会の最後に、日本全国の銘菓を取り寄せて皆で食べようという企画を続けていた。大きな日本全国の地図を用意し、食べたらその都道府県にお菓子の写真を貼った。そして、9月、ついに最後の47か所目の写真が貼られる日が来た。ここまで約４年。会を担当する職員は毎回美味しそうなお菓子を探してくれた。ちなみに最後を飾ったのは滋賀県代表、琵琶湖のえび煎餅である。海老の香ばしい風味豊かな薄焼き煎餅を皆おいしそうに食べていた。さて次は…、世界のお菓子といこうか？　　（めいわ課長　中田　憲一郎）

□自閉症の基本的な支援技術の獲得へ向けて　　（根郷通所センター）

特別支援学校より入所を前提とした実習先としてのお話を頂いた際に『行動障害（自閉症）のある方の受入れをお断りした』こともあった。理由としては職員の経験の低さにより対応が出来ないだろうと判断したためである。

支援技術の獲得や経験を得ることは一朝一夕にできるものではないため継続的に内部研修を実施し職員育成と風土作りを地道に続ける必要があると考えている。

現時点においての内部研修の進捗状況としては強度行動障害支援者養成研修（基礎研修）と同等のカリキュラムに加えABA（応用行動分析）およびTEACCHプログラム概要まで進んでいる。また、内部研修と同時に実践を交えたケース検討を進めたことで障害特性を理解した職員間の阿吽の支援も見られるようになってきた。ここにたどり着くまでに相応の時間を要してきた。まだまだスタートラインに立った感は否めないが、地域の行動障害のある方の受け入れ先のひとつとして成長すると共に行動障害のある方に対して職員が安心して向き合える環境作りを構築していく。　　（めいわ通所部所長　菊地　暁生）

□突然の故障　これも BCP だ　　（リホープ）

９月１１日　「エアコンは動いてるんだけど、涼しい風が出てこない」と利用者から話があり、調べてみると 2F 右半分のエリア（居室・廊下・談話室）でエラーメッセージが出ていた。エラー番号からドレン関係が故障している可能性が高い。ドレン配管関係の故障の場合、配管かエアコン内の掃除、または、部品の交換が必要となり時間がかかる。利用者の行き場をどうするか？

幸い業者は手配できたが、来所が１７時になってしまうとのことで、掃除可能な台数は３～４台、エラーが出ているエアコンすべての復旧は難しい。「部屋から絶対に動かない（動かせない)」方もいる。本日も熱帯夜、非常に厳しい状況となった。掃除については、移動が難しい利用者の部屋を優先にしてもらい、他の方については、入院部屋、ショート空き部屋など、使用可能な部屋で過ごしていただけるよう調整した。幸い掃除をした居室は復旧した。

「エアコンが使用できない」という状況は、ある意味 BCP の状況と言ってもよい。もし、今回のように残暑が厳しい時期に故障し、復旧まで数日間要する場合、運営上大きな支障となってしまう。生活介護（通所）や短期入所利用予定者がキャンセルになる可能性も高い。BCP 対策となると、どうしても災害を想定してしまうが、今回のような故障や予期せぬ停電などで、エアコン、水道、厨房、エレベータが機能しないなど、利用者の生活に大きな影響を及ぼす可能性があることについても、対策を考えておかなければならない。

（リホープ副施設長　麻生　知明）

□長い夏　（山王の家）

９月に入っても真夏のような暑さが続いてクーラーが欠かせない。効きすぎではないかと思うこともあったが、熱中症も怖いので夜間の室温設定も本人に任せていた。ただ真夏とは違って明け方涼しくなることもあり朝鼻水を出していることがあると掛布団があればと思ってしまうこともあり、どこまで自身に任せるべきなのか思案している。

昨年の今頃は新型コロナウイルス罹患者が２名出て、初めてグループホーム内で感染者対応をしていた。今夏も１人の利用者が３８度の発熱。緊張が走るが「夏風邪」の診断。熱もほどなくして下がった。その後も罹患者は出ることなく過ごせている。

（山王の家管理者　岡本　綾子）

□利用者と共に秋まつりに出店　　（ワークショップかぶらぎ）

佐倉市移転 30 周年となる秋まつりに向け、数か月前から WS かぶらぎ、よもぎの園を中心にアシスト、かけはしを加えた『佐倉圏域』で飲食ブースを出店する計画が動いていた。子ども向けメニュー作りをよもぎの園が担当し大人向けメニュー作りをかぶらぎが担当した。

大人向けメニューとして、ホットドッグのほか「レモンサワー」や「モヒート」といった秋まつりではまだ馴染みの薄いアルコール類を販売する試みを行った。

利用者に企画を説明し、参加希望者を募ったところ、３名の方が希望され、準備段階から当日の販売まで、ミーティングを行いながらポップの作成や調理の段取り、手順書作りに精を出した。また１名の利用者は「タイミングが無くて伝えられなかったけど、参加したか

った」と住んでいるグループホームから、世話人に教えてもらい、電車を乗り継いで参加してくれるという嬉しいハプニングもあった。

事業所のパンフレットに“かぶらぎで得られること”として「仲間やスタッフとつながることで、自分のやりたいことや、意欲が湧いてくる。それがリカバリーの原動力になる。」と記している。今回参加した利用者も、かぶらぎに来た当初は、自分が愛光の秋まつりで地域の方々と軒を並べて出店し、売り子をするなどとは思いもしなかったと思うが、雨風のなか活き活きとお客さんや出店者らと交流している彼らの様子に、力強くリカバリーを歩んでいるなと感心した。　（ワークショップかぶらぎ主任　宮部　和樹）

□モニタリングと地域連携推進会議　（ジョーの家）

今月はモニタリングの実施月であった。特に定期的な振り返りが行われていない入居者との個別面談は、貴重な機会となった。普段ゆっくりと会話ができないためか、話が弾んでしまい脱線してしまうことがあった。モニタリングを通じて、入居者の日常生活での楽しみや、普段とは異なる時間を楽しんでいる様子が伺えたことは大きな収穫であった。入居者の現状や課題を把握し、個別の支援計画に反映することで、生活の質の向上に繋がるのではないか。

モニタリングを通じて感じたのは、ジョーの家のコミニティーは、限られているこことである。次年度から地域連携推進会議が義務化されることで、地域におけるジョーの家としての認知度の向上、地域住民との交流を深め、入居者の社会参加を促進することが出来る。そしてジョーの家が地域に根ざしたホームへと発展、コミニティーが拡がることで、入居者の生活が豊かになるのではないかと期待している。　（ジョーの家　髙橋　健）

□よもぎ農園　（よもぎの園）

今年はプランターなどで野菜やお米を栽培してきた。収穫の楽しさや植物の成長を休憩時間などに眺めてもらうことが目的である。思惑通り、休憩時間にはそれぞれの野菜の成長や収穫を職員、利用者共におこない良い時間を過ごすことができていた（ナス、ミニトマト、シソ等）。

９月中旬に待ちに待ったお米を収穫することになった。プランター栽培であったが順調に育ち、稲穂は立派に首を垂れキッチンハサミを使って根元から稲を切って収穫した。切り取られた稲は根元を縛ってしばらく干すこととした。職員、利用者にとって米の収穫は初めてのことであり笑顔溢れる時間であった。

普段食べているお米の成長と収穫が体験できたことは何にも代えがたい貴重な体験であった。　（佐倉市よもぎの園主任　近藤　真一）

□「かけはし」に聞いてみよう！　（かけはし）

地域にお住いだという女性の方からかけはしに問い合わせの電話が入った。内容は京成佐倉駅北口ロータリーの横断歩道を白杖を突いた女性の方が渡っていたが、もうすぐ赤のタイミングで渡り始めて案の定途中で赤になってしまい非常に危険だったので駆け寄って一緒に渡りましたとのこと。お話もされたそうで、ここ数年で急激に視力が低下して現在は人が前に立てばぼんやり輪郭がわかる程度。いつも車の走行音を聞いて「青」か「赤」を判断して「運を天に任せて」渡っていると話していたそうである。京成佐倉駅前は、点字ブロックは敷かれているが確かに音響式信号機の設置は無い。電話を掛けて下さった方も「音声が出る信号機が

あればいいのに」とは思ったがどこに連絡すればいいものか悩み相談支援事業所の「かけはし」に聞いてみよう！となったそうである。

たしかに音響式信号機の設置の要望はどこに出せばよいのか・・・市？信号機だから警察署？そもそも当事者以外が要望や申請可能なのか・・・。お電話下さった方へのしっかりとした回答はできなかったが「少しでも安全に暮らせる街になるといいなと思って誰かに伝えたかっただけです。」とだけ仰って電話をお切りになりました。

障害者を気にして下さる住民が居ることと相談するなら「かけはし」と思って電話をかけていただけたことに何だか嬉しい気持ちになりました。地域の声をもっと聞いていけるよう努めたいと思った出来事でした。

（かけはし所長　戸室　輝大）

□佐倉市介護者のつどい　（はちす苑）

「佐倉市介護者のつどい」とは、佐倉市からの委託を受け、介護者同士における意見交換や交流の場を年 8 回提供する事業である。はちす苑居宅サービス課の事業として、ケアマネジャーが主催となり、デイ相談員も毎回参加のほか、はちす苑の看護師や栄養士・包括からの講話も組み込み、苑全体で支えている事業でもある。

参加者は、平均 7 名ほど。職員の介入がなくとも、話しに花が咲き、仲間同士で支えあう言葉が飛び交う会である。今年度第 4 回「在宅での介護支援について」、外部講師に排泄ケアの講話を依頼し、9/12 に開催された。

今回の担当ケアマネジャーは、オムツや福祉用具を適切に活用することにより、介護負担の軽減を図れることだけではなく、外出時の不安の軽減・さらには家族団欒の時間や余暇時間を大切にしてほしいという思いも込めての開催であった。

皆様、熱心に講師の話しを聞き、介護生活を振り返る方もいた。
終了時には、アンケートを記入していただくことになっており、感想や今後取り上げて欲しい内容に関しての質問に、「気持ちがリフレッシュされました」「自分だけではないと思える」「これからも介護のことは何でも学びたい」等、職員も心が温まる言葉が並んでいる。
今後も微力ながら事業を通し、介護者に寄り添い続けたい。

（はちす苑　副苑長　鈴木亜希子）

□介護者教室「もっと知ろう認知症」開催　（南部地域包括支援センター）

２６日（木）今年度３回目となる介護者教室を開催した。内容は認知症の対応と予防について、東邦大学医療センター認知症認定看護師を講師に招いて講義中心に行った。参加者 19 名のうち認知症の家族介護者は 6 名。その他の方は、「今後の備えのため」「地域の活動の参考にしたい」との理由で参加されていた。途中、包括職員中心に介護予防体操コグニサイズを取入れ、参加者の気分転換も図った。後半は判断能力が低下してきた時の制度として成年後見制度や日常生活自立支援事業の説明も行った。

参加者の皆さん、認知症に対する関心が高く、質疑応答では認知症の対応方法や新薬について質問が挙がっていた。終了後には講師が個別相談に応じていただき、参加者の理解は深められたのではと感じる。

包括の相談においても、認知症の相談件数は年々増加しており、さらに家族が対応に苦慮するケースが増えている。家族介護者の負担軽減につながるような内容を企画したが、介護者の

方からは「具体的な介護方法についてもっと知りたい」との意見も挙がった。基本的な知識と具体的な実践方法、どちらも大切であり伝えていきたい内容である。来年度以降、内容を精査しつつ求められているものを提供できるよう考えていきたい。

（南部地域包括支援センター管理者　森　由美子）

□ふれあいサロン南部　　（南部地域福祉センター）

９月６日市内のボランティア団体「五色豆」による　落語・手品の公演が、センターA 棟大広間にて開催された。地域の方 35 名が訪れ、落語と手品の演目を楽しまれた。「五色豆」は、市内公民館で定期的に開催されているとのこと。メンバーに女性の落語家がおり、演目では、よくある一人二役で語る演出はとてもリアルで、多くの人の笑いに包まれていた。

（南部地域福祉センター　青山　秀人）

□水遊びリベンジ！　　（佐倉市南部児童センター）

９月２日（月）学校の始業日。休館日だったが、午後から臨時開館をした。始業日などの早帰りの日は、学校で遊ぶ約束をしてくるのか、遊びに来る子どもの人数が多くなる。この日、他学年・他学校との交流を目的とし集団で遊べるイベントを企画した。今回開催したのは、「水遊び大会」。毎年、水遊びは７月に行っているが、今年は光化学スモッグ注意報発令により中止になっていた。楽しみにしていた子どもたちのがっかりした顔が忘れられず、どこかでリベンジできないかと考えていたところ、近隣の小学校では９月にプールの授業があることを聞いた。それならと思い、猛暑日が続く９月、児童センターでも「水遊び」をリベンジすることにした。８月の末には台風が発生し、またまた開催が危ぶまれたが、当日は水遊び日和。水風船を思い思いの大きさに膨らませて投げ合いをしたり、水鉄砲で水を掛け合ったりと生き生きとした表情で楽しむ姿が見られた。今まではなかった９月開催。今年のような猛暑は来年も続くかもしれない。熱中症などの安全面を考えると、７、８月の猛暑の中の開催よりも、むしろ９月のほうが安全かもしれないと感じた。とはいえ、「夏休み」に開催したほうが、気持ちも盛り上がるのだろう。安全面に配慮しながらも、子どもたちが最大限に楽しめる選択肢をこれからも考えていきたい。　　（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□令和に生きるアナログ　　（学童保育所）

「ねえ、見てて～」とある男児。あやとりにはまったらしく、気付いた時にはもう１段梯子からスイスイと８段梯子まで見せてくれるほどの腕前。職員も二人あやとりの相手をさせてもらったが、川や田んぼ、鉄橋、ダイヤなどがエンドレスに続くやり方をマスター。ほうきや指ぬき、富士山から始まった彼のあやとりは今やカメ、飛行機、蝶々など様々な形になっている。お迎え時にも披露し、我が子の意外な一面に驚くやら嬉しいやらで母親は微笑みを浮かべていた。タブレット宿題の時には「Wi-Fi が届かない～」「YouTube みたい～」などと言って普段はデジタルな環境に囲まれている子どもたちだが、興味を惹かれて実践しそれが成功していくと、アナログなものにもはまっていくのだなと、ホッと温かい気持ちになった。段ボールを切り抜いてベイブレード、折り紙で小さなランドセルやカバン、行事のストロー飛行機では、キレイな模様を描いて大事そうに持ち帰る姿。子どもたちの興味のアンテナは、今昔問わず広く入り込んでいくことを実感した。（第二根郷学童）　　（学童保育所主任　平野　美幸）